

# アブラハム契約にモーセ律法は包摂されている

－石が転がれば山は移る－

【新改訳 2017】エペソ人への手紙 6 章 12～13 節

12 私たちの格闘は血肉に対するものではなく、支配、力、この暗闇の世界の支配者たち、また天上にいるもろもろの悪霊に対するものです。13 ですから、邪悪な日に際して対抗できるように、また、一切を成し遂げて堅く立つことができるように、神のすべての武具を取りなさい。

## ベレーシート

使徒の働きの大宣教命令(1:8)、この者もイエシュアの証人としての働きに加えられていることを信じて心から感謝します。今回は、先祖の言い伝えに潰されないことを目指して「ギルガル」の霊的真理をヘブル語から教えていただこうと願います。ヘッセの「車輪の下」の挑戦に対する現在の私の答えです。神学校で学んだ青年の顛末を通して先祖の言い伝えである「車輪」に異議を唱える挑発的な話です。ここで記す内容は千葉恵著「信の哲学」をめぐる千葉先生ご自身との熱い対話（2018 年暑い夏）において示されたことを土台としています（聖句は新改訳 2017、ヘブル語・ギリシア語は Bible Hub より）。二人とも神学校で学んでおりません。

まず「ギルガル」の霊的意義について確認したあと、聖書の最初にアーヴァルを見つけた突飛な話をします。続いて、今回の提案の土台となる物的証拠を銘形先生のみドゥラージュを引用しつつ提示します。その後、すべての根拠となるイエシュアの十字架の血潮を仰ぎ見ます。ここでは驚くべき HP から引用します（驚いているのは私だけかもしれませんが私の周囲では知る人はいないと思います）。状況証拠となる聖書箇所も提示します。最後に応用問題を解いて稿を閉じます。

なお、前回の提案でも今回の学びでもヘブル語・ギリシア語の初歩的不備は銘形先生に修正していただいております。そもそも、この学び自体が聖霊様に依拠したいと願っている出来事であり、私どもはキリストの共同相続人として、霊的協働作業を实践させていただいていると認識しております。私に示されたことなのか銘形先生から学んだことなのか、区別できないことも多くなりました。とはいえ、今後指摘される修正点の責は筆者が負うことは勿論のことです。

## 1. 「ギルガル」の霊的意義

聖書で「車輪」というと思いつくのがエゼキエル書です。1章、激しい風と大きな雲ときらめき渡る火の中から登場する輪の中には輪があり目で満ちています。ケルビムとともにありケルビムの顔・人間の顔・獅子の顔・鷲の顔をもつことが10章に記されています。2章でエゼキエルは巻物 (a scroll) を見せられ3章で食べるように言われます。巻物はメギッラー(מִגִּלָּה)です。ガーラル(גָּלַל to roll, roll away) から派生した言葉です。10:13 私はそれらの輪が「車輪ガルガル(גָּלְגָּל)」と呼ばれるのを聞いた。

ガルガルもガーラル(גָּלַל)から派生しております。ガーラル(גָּלַל)の初出はヤコブがベテルで神と出会い石の柱を立てた後、創世記29章3節、井戸で石を転がすところです。深く愛することになるラケルと出会う場面です。

エゼキエル書で車輪のそばにいるのは墮落しなかったケルビムです。悪魔はかつて油そそがれたケルビムの仲間が墮落した存在と考えます(エゼキエル28章、イザヤ14章)。諸悪の根源は金(代替価値、偶像礼拝)を第一とすることです(Ⅱテモテ6:10)。今回の提案はこの悪魔にだまされないようにすることを目指します。Bible Hubによりますと、ギルガルという場所がどこなのか、一箇所であるのか複数存在したのか定説はないようです。「ダビデの町」が聖書には二箇所出てきます。エルサレム(Ⅱサムエル5:7,9)とベツレヘム(ルカ2:4,11)です。一つに見えない場所で神が何を語ろうとしているのか。神は一つの出来事を語ろうとされていると考えます。

ギルガルにおける霊的意義については銘形先生が詳しく記しておられます。12個の記念の石、割礼、過ぎ越しの三つのものは過去にかかわるものである、「ギルガル」という地名は「ガーラル」(石を転がす、ゆだねる)という動詞から派生した固有名詞であり、詩篇37篇5節では「ゆだねる」と記され、石を転がすように、どの方向に転がって行くかわからないとしてもこれからの行く末を主にゆだねなさいという意味である、ギルガルという場所は戦いのたびごとに帰って行く戦いの本丸、本陣營で、戦いの度にギルガルに戻ったことが勝利をもたらした秘訣だったとされています。

イエシュアの弟子の筆頭「シモン」(旧約名シメオン)がイエシュアによって「ペトロス(πέτρος) a piece of rock」と呼ばれた直後にイエシュアを叱ったのは、「ペトラ(πέτρα) a mass of rock」と「ペトロス」を混同した結果である可能性があります。ペテロの信仰告白の前後も大変に重要です。マタイの福音書12章24節でユダヤ人指導者が、イエシュアがメシアであることを公的に拒否します。それに続く重要な出来事がルカの福音書9章に記されています。

9:1 イエスは十二人を呼び集めて、すべての悪霊を制して病気を癒やす力と権威を、彼らにお授けになった。

9:16 そこでイエスは、五つのパンと二匹の魚を取り、天を見上げ、それらのゆえに神を

ほめたたえてそれを裂き、群衆に配るように弟子たちにお与えになった。

マタイの福音書 16 章 16 節のペテロの信仰告白、ルカでは 9 章 20 節です。マタイでは「あなたは」と記します。個人的な契約関係です。

9:20 イエスは彼らに言われた。「あなたがたは、わたしをだれだと言いますか。」

ペテロが答えた。「神のキリストです。」

9:28 これらのことを教えてから八日ほどして、イエスはペテロとヨハネとヤコブを連れて、祈るために山に登られた。

マタイとマルコは「六日」と記します。このような箇所は非常に大切です。神は何か重要なことを伝えたいのです。イエシュアは高い山で変貌されモーセ・エリヤと語られます。話の内容は「イエシュアがエルサレムで遂げようとしておられる最期について」(9:31)ですが、「最期」はギリシア語では「エクソドス」(ἐξοδος)です。エジプト脱出です。再創造です。エルサレム神殿での十字架の栄光の業と重なっています。ペテロにはわかりませんでした。仮庵・天幕を作ろうとしたのは正しい発想ですが(ゼカリヤ 14 章)、メシアの初臨と再臨の分節化はできておりませんでした。

「八日ほどして」について考えます。創世記 1 章 1 節から 2 章 3 節までに七日間のことが記されています。単純に考えると 2 章 4 節以降は八日目の出来事ですが、私は「八日ほど」した場所と考えます。神は「八日ほど」した場所で六日目の出来事を重ねるようにして記しておられるのです。人間の創造は神にとっても大変によるこぼしいお仕事であったのでしょう。それは御使いの創造に続く再創造であった、というのは考え過ぎでしょうか。イエシュアの割礼の日が誕生してから八日目であり、それはエルサレム神殿であったことと深く関連していることは確かであると考えます。

## 2. アーヴァル(אֶבֶר)を聖書の最初に見つけました

2018 年夏に千葉恵先生との対話の中で示されたのが「アーヴァル(אֶבֶר)」です。私はメシア復活の際、主の使いが天から降りてきて石をわきに転がし(マタイ 28:2)、復活のイエシュアは転がされた石の前を通過し、その石は復活のイエシュアに見られていたと考えました。創世記 1 章 1 節の最初は「アーレフ」אでなく「ベート」בなのかという素朴な疑問を持たれている方は多くいらっしゃると思いますが、私はאでなく「アイン」עをそっとベレーシート(בְּרֵאשִׁית)の前に置いてみました。すると「アーヴァル(אֶבֶר)」となりました。通過する、再創造、復活と考えました。そして、物的証拠を探し求めていたところ、12 月 25 日付けの銘形先生の記事で示されました。ヒットした箇所を引用します。「アーヴァル」の物的証拠です。

聖書で初めて「ヘブル人」という語彙が出てくるのは創世記 14 章 13 節で、アブラハムに対して言われた言葉です。それは「河を渡ってきた者」という意味です。事実、アブラハムはユーフラテス川を渡ってカナンの地にやってきた者です。しかしこの「ヘブル人」の根拠はアブラハムのはるか以前にまでさかのぼります。それは、ノアの系図を引き継いだセムの子の一人、「エベルのすべての子孫の先祖」とあります(創世記 10 章 21 節)。この「エベル」から「ヘブル人」という語が生まれています。エベルもヘブル人も、原語は同じ語幹(עֵבֶר)です。エベルには二人の息子「ペルグ」と「ヨクタン」が生まれますが、彼らのうち、「ペルグ」の子孫がアブラハムなのです。

エベルもヘブル人もアーヴァル(עֵבֶר)でアブラハム契約につながっている、アブラハム契約は創世記 1 章 1 節から始まっていると考えます。

### 3. モーセ契約はアブラハム契約に包摂される可能性—物的証拠

話が大きく脱線しましたが、以下の論の礎となります。

出エジプト記に戻ります。【主】はモーセを殺そうとされました。妻ツイポラは火打石を取り自分の息子の包皮を切り取りモーセの両足に付けて「まことに、あなたは私には血の花婿です」と言いました。4 章 26 節「主はモーセを放された。彼女はそのとき、割礼のゆえに『血の花婿』と言ったのである」と記されています。出エジプト記 4 章 21 節でモーセは妻や息子たちを連れてエジプトの地へと帰ります。「息子たち」は複数です。しかし 4 章 25 節で妻ツッポラが包皮を切り取った「息子」は単数です。ここで包皮を切り取る割礼とは申命記 10 章 16 節の「心の包皮」に施される出来事であり、八日目に人の子イエシュアも心の包皮を切り取られました(ルカ 2:21)。このとき、聖霊に上から満たされていたシメオン(同 2:25)が母であるマリア「自身の心」を、すなわち、はらわたを刺し貫かれ、多くの人のはらわたもあらわにされることを預言しています(同 2:35)。ですから、ツイポラの「自分の息子」は 18 章 3 節のゲルショムではなく、4 節のエリエゼルです。イエシュアの割礼の傍らに寄り添っていたイエシュアの母がパラクレートス(παράκλητος)聖霊であり、創世記 24 章イサクの嫁探しを助けたのがダマスコのエリエゼル(助け主)であると考えられるからです(創世記 15:2)。聖霊様も十字架の杭ではらわたを刺し貫かれるのです。神はアブラハムの人生最大の懸案である跡取り問題においてエリエゼルを想起させてそのはらわたがわななくことを知り、ご自身のはらわたのわななきと同一視されました(15:4)。そして、15 章 5 節と 15 章 18 節の契約を一方向的に与え、15 章 6 節の信仰義認とされました。これは前回の提案です。今回の提案である「モーセ契約はアブラハム契約に包摂される可能性」の物的証拠は 15 章 9~17 節の幻です。

幻が示す現実の歴史においてモーセ律法が付与されイスラエルの民も自由意志で契約をあっさり快諾したものの（出エジプト記 24:7）遵守できないことは多く記されています。そして、15章17節で神の怒り（煙の立つかまどと燃えているたいまつ）が切り裂かれたモーセ契約（血まみれの牛・子羊・山羊）の間をアーヴァル（復活）されています。「アーヴァル」の物的証拠と「モーセ契約はアブラハム契約に包摂される可能性」の物的証拠とはここでひとつとなります。声なき声です。アインは神の目でもあります。エゼキエル 1 章、輪の中にはさらに輪があり目で満ちているのです。

モーセの妻ツィボラが割礼のゆえに「血の花婿」と言いましたが、「血の花婿」とは誰を指しているのでしょうか。花嫁は花婿のことを良く知っています。文脈からは妻ツィボラの夫であるモーセのことでしょう。私どもはイエシュアを連想するでしょう。両方正しいと考えます。18章2～3節をみると、兄ゲルショムは異邦人のタイプ、弟エリエゼルはファラオから助け出されたイスラエル民族のタイプと考えます。イエシュアの割礼・十字架・埋葬・復活を介して、モーセ契約はアブラハム契約に包摂されていると考えます。

#### 4. イエシュアの十字架



私に示されたことは突飛ですが、同志に出会うと励みになります。以下の HP はまさにそうです。まずはガーラルにターヴをつけてゴルゴタとなることです。Bible Wheel から英文のまま一部引用します。ゴルゴタの十字架は主の車輪の車軸であると記しています。

マタイの福音書 19 章 17 節 イエシュアは自分で十字架を負って、「どくろの場所」と呼ばれるところに出て行かれた。そこは、ヘブル語ではゴルゴタと呼ばれている。

左の絵は驚きです。車輪の車軸はイエシュアの十字架であるということです。

Great insight into the divine design of the Bible emerges from the study the two Hebrew words for a Wheel, **ophan** (אֹפָן) and **galgal** (גִּלְגָּל). Both were used in Ezekiel's vision of the Chariot when he said "As for the wheels (אֹפָנִים, ophanim, plural), it was cried unto them in my hearing, O wheel (galgal, singular)."<sup>1</sup> The voice in the vision identified the plurality of wheels (ophanim) as a singular Wheel (galgal). The four individual wheels are described as having "one likeness, as if a wheel (ophan) had been in the midst of a wheel (ophan),"<sup>2</sup> whereas all four collectively are identified as the **Galgal**. The traditional Jewish understanding of this word are discussed in [An Ancient Witness](#).

The Aramaic<sup>3</sup> **Gulgotha**(גולגותא) became **Golgotha**(Γολγοθᾶ) in Greek. It arose from **galal** through the Hebrew word for a **skull**, **gulgoluth**(גולגולת), so called because of its round form.

The name of the place where the Lord was crucified, therefore, differs from the Hebrew word denoting a wheel, **galgal**(גלגל), by the addition of two letters, the **Aleph**(א) and the **Tav**(ת). These are the first and last letters of the Hebrew alphabet that govern the overall structure of God's Wheel. They correspond to the Greek Alpha and Omega, by which the Lord God identified himself, saying, "I am Alpha and Omega, the beginning and the ending, saith the Lord, which is, and which was, and which is to come, the Almighty."

## 5. モーセ契約はアブラハム契約に包摂される可能性—状況証拠

モーセ律法はアブラハム契約成就を目的として一時の養育係として神が利用したことを確認して状況証拠をいくつか紹介します。

出エジプトを企図されたときの神はアブラハム契約を思い起こしています。

2:23 それから何年もたって、エジプトの王は死んだ。イスラエルの子らは重い労働にうめき、泣き叫んだ。重い労働による彼らの叫びは神に届いた。

2:24 神は彼らの嘆きを聞き、アブラハム、イサク、ヤコブとの契約を思い起こされた。

出エジプト記ではじめに明らかにされた神の名は「アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神」です (3:6)。これはモーセにはじめて啓示された名前です。そして、イエシュアの「エゴ・エイミー」の先駆となるもうひとつの名は「エフイエ・アシェル・エフイエ」です (3:14)。モーセの求めに対して語られた名です。

出エジプト記 3 章 14~16 節

14 神はモーセに仰せられた。「わたしは『わたしはある』という者である。」また仰せられた。「あなたはイスラエルの子らに、こう言わなければならない。『わたしはある』という方が私をあなたがたのところに遣わされた、と。」 15 神はさらにモーセに仰せられた。「イスラエルの子らに、こう言え。『あなたがたの父祖の神、アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神、【主】が、あなたがたのところに私を遣わされた』と。これが永遠にわたしの名である。これが代々にわたり、わたしの呼び名である。 16 行って、イスラエルの長老たちを集めて言え。『あなたがたの父祖の神、アブラハム、イサク、ヤコブの神、【主】が私に現れてこう言われた。「わたしは、あなたがたのこと、またエジプトであなたがたに対してなされていることを、必ず顧みる。」

年を重ねたアブラハムは、神に対して「天の神、地の神である主」という呼び方をして

いますが（創世記 24:3）、モーセも死を前にして天と地を証人に立てて渾身、イスラエルの民に対して【主】を愛し御声に聴従することを勧めています。

#### 申命記 30 章 19～20 節

19 私は今日、あなたがたに対して天と地を証人に立てる。私は、いのちと死、祝福とのろいをあなたの前に置く。あなたはいのちを選びなさい。あなたもあなたの子孫も生き、20 あなたの神、【主】を愛し、御声に聞き従い、主にすがるためである。まことにこの方こそあなたのいのちであり、あなたの日々は長く続く。あなたは、【主】があなたの父祖、アブラハム、イサク、ヤコブに与えると誓われたその土地の上に住むことになる。

ルカの福音書でマリアのマニフィカートの最後を見ると、マリアはアブラハム契約に生きていることを自覚していることがわかります。マリアだけではないでしょう。多くはアブラハム契約を自覚していたと考えます。

#### ルカの福音書 1 章 55 節

私たちの父祖たちに語られたとおりに、アブラハムとその子孫に対するあわれみをいつまでも忘れずに。」

洗礼者ヨハネの父親もアブラハム契約を自覚していました。

#### 同、1 章 67～74 節

67 さて、父親のザカリヤは聖霊に満たされて預言した。68 「ほむべきかな、イスラエルの神、主。主はその御民を顧みて、贖いをなし、69 救いの角を私たちのために、しもベダビデの家に立てられた。70 古くから、その聖なる預言者たちの口を通して語られたとおりに。71 この救いは、私たちの敵からの、私たちを憎むすべての者の手からの救いである。72 主は私たちの父祖たちにあわれみを施し、ご自分の聖なる契約を覚えておられた。73 私たちの父アブラハムに誓われた誓いを。74 主は私たちを敵の手から救い出し、恐れなく主に仕えるようにしてくださる。

モーセ契約はアブラハム契約に包摂される可能性の状況証拠をいくつか記しました。

## 6. ゼカリヤ書で応用問題を解く

ここで、私どもも石を転がしてみましよう。実践・応用問題に入ります。

4 章 6～10 節は元々 1 章 7 節の「【主】のことば」の内容であると考えます。神の御配慮によって移動され二本のオリーブの木の話(4:1-4:9 と 4:11-14)の間に挿入されております。

ですから、内容が浮き上がっております。変だなあという気づきは大切です。二本のオリーブの木はロマ書 11 章のオリーブの木（アブラハム契約と考えます。異邦人信者は接ぎ木であり創世記 12:3 の成就です）であり、黙示録 11 章の二人の証人のタイプであると考えます。4 章 10 節「ゼルバベルの手にある重り縄」によってエルサレム第二神殿は計測されましたが、黙示録 11 章 1 節ではエルサレム第三神殿と祭壇と礼拝者が測られます（エゼキエル 40 章以降の第四神殿は黙示録 20 章千年王国で成就します。ゼカリヤ書 14 章はそれを預言しています）。ゼカリヤ書は第三神殿を預言し黙示録の第四神殿を指し示します。しかし、黙示録 21、22 章新天新地は預言しておりません。前回の報告で説明したことです。

そこで、4 章 6～10 節を 1 章 7 節の後に戻して読んでみましょう。すると、見えないものが見えてきます。一人の人が馬に乗って、黙示録 6 章からの患難期の預言となります。2 章では現在の城壁のないエルサレムが描かれ、3 章 8 節に若枝の再臨が預言され、9 節で七つの目（聖霊さま）に満ちたエベン・エハッド（唯一のかしら石）が一日（ヨム・エハッド：創世記 1:5 の成就）で地の咎を取り除かれる、と言うのです。そして、4 章で再びロマ書 11 章アブラハム契約と黙示録 11 章二人の証人を確認した直後に 5 章で巻物が飛び出します。この巻物はイエシュアによって広げられ、聖書のことばの成就がイエシュアによって宣言されます（ルカ 4:17-21）。イザヤ書の成就是ゼカリヤ書の成就です。聖書のみことばの成就をみることは私どもにとって大きな励ましです。イエシュアが言うのですから間違いありません。

#### ゼカリヤ書 4 章 6 節

これは、『権力によらず、能力によらず、わたしの霊によって』と万軍の【主】は言われる。

【主】はゼルバベル・ヨシュアに語られ、ハガイ・ゼカリヤを介してエズラ・ネヘミヤ・神の民を励まし、ゼルバベル神殿と城壁を再建されました。4 章 7 節の「大いなる山」は、イエシュアが「山よ移れ」と言われた山・この世の支配者と化した当時のエルサレム第二神殿（ゼルバベル神殿）であります。今の私どももからし種ほどの信仰があれば（マタイ 17:20）万軍の【主】の霊で山を移すことができます。この山は、この世の制度であり、ヘッセの言う「車輪」です。

私どもも聖霊様によって重く栄光に富んだ 4 章 7 節のかしら石を持ち上げさせていただき、1 章 7 節まで移動させていただくならば、見えなかった【主】のご計画が見えてきます。山は移るのです。ここは受動的能動態、能動的受動態（千丈造語）の身構えが要求されます。ヨルダン川の真ん中の石が 12 人の祭司によって 12 個ギルガルに運ばれました（ヨシュア記 4 章 8 節）。私どももギルガルまで運んで、主イエシュアに石を見ていただくと、見えなかったものが見えてくると考えます。

昼も夜（夢・幻）も一日 24 時間、み言葉を「ハーガー」(הָגָה)することが鍵であると考え



えます。創世記 15 章アブラハムの夢・幻を私どもも体験すること、これは祈り求めてゆくべきことでしょう。ゼカリヤ書に戻ります。

5:1 私が再び目を上げて見ると、なんと、一つの巻物 (מְגִלָּה) が飛んでいた。

5:2 御使いは私に言った。「あなたは何を見ているのか。」私は答えた。「飛んでいる巻物 (מְגִלָּה) を見えています。その長さは二十キュビト、幅は十キュビトです。」

ゼカリヤは「主は覚えて下さる」という意味です。エレミヤ書の「ロー・ザーハル」「思い出さない」にリンクしていると考えます。31 章 34 節「彼らはもはや、それぞれ隣人に、あるいはそれぞれ兄弟に、『【主】を知れ』と言って教えることはない。彼らがみな、身分の低い者から高い者まで、わたしを知るようになるからだ——【主】のことば——。わたしが彼らの不義を赦し、もはや彼らの罪を思い起こさないからだ。」

このゼカリヤが、この度、応用問題として、イエシュアがかしら石であることを私に示しました。興味あることに、メシアの先駆けとして現れることが預言されている預言者エリヤ (マラキ書 4:5) は、ザカリヤを介して、洗礼ヨハネとして歴史に登場しました (ルカ 1:5)。ザカリヤの旧約名はゼカリヤです。石ころからアブラハムの子孫を起こすことができると叫んだのは洗礼者ヨハネ (マタイ 3:9) です。これも状況証拠と考えます。

## 7. 律法解釈も応用問題として

これも応用問題です。律法 (νόμος) は「野茂す」、つまり、神のひねり業、トルネード (プロ野球投手の野茂英雄のメジャーリーグ時代の愛称) です。浅田真央の大技トリプルアクセルのようなものでしょうか。決まったときの残像が真実なのです。3 回転ではなくて 3 回転半なのです。割礼は上位アブラハム契約のしるしであり下位モーセ契約の条項です。今の私どもはキリストの律法 (ガラテヤ 5:2) ・自由をもたらす律法 (ヤコブ 2:12) の支配下にありません。エレミヤ 31 章で預言されていたもので、ペンテコステで成就しました。使徒たちや預言者たちという土台の上に建てられていてキリスト・イエシュアご自身がその要の石です (エペソ 2:20)。モーセ律法よりもきびしい律法です。創世記 15 章の神はうわべではなく、はらわた・わななきを数えられます。イエシュアの地上生涯はモーセ契約の時代ですが、イエシュアのレーマは常に最上位です。最初であり終わりである方は、新しい契約よりもずっと上におられると考えます。有限ではなく無限の永遠なるお方です。トルネードは突風でもあります。吹き飛ばされない細心の注意も必要とされます。み言葉が頼りです。

## 8. ガリラヤ宣教 使徒の働き 私どももゴロゴロ車輪を回しましょう

イエシュアは宣教の業をガリラヤでスタートされました。そのはらわたのわななきをも

う少し知りたいと思います。

#### ヨシュア記 3 章 17 節

【主】の契約の箱を担ぐ祭司たちは、ヨルダン川の真ん中の乾いたところにしっかりと立ち止まった。イスラエル全体は乾いたところを渡り、ついに民全員がヨルダン川を渡り終えた。

出エジプトの際は 14 章 25 節、戦車の車輪が外され動きが阻ばれました。エジプト人は「イスラエルの前から逃げよう。【主】が彼らのためにエジプトと戦っているのだ」と言いました。そして、水に飲まれました。しかし、ヨシュア記では、神の箱、すなわちイエシュアの十字架を車軸に据えた車輪が担がれ、乾いたところを渡り終え、ギルガルへと到着しました。ヨシュア記 5 章 15 節、【主】の軍の将はヨシュアに言った。「あなたの足の履き物を脱げ。あなたの立っている所は聖なる場所である。」そこで、ヨシュアはそうにした。

モーセも同じ体験をしています。銘形先生の出エジプト記 3 章 5 節の講解では二つの解釈が示されています。①自分の権利、思いや考え、立場を捨てなさいという意味。ボアズがナオミの土地とルツを買い戻した際も同様の行為がなされました。②「くつ」を履ける名誉と誇りある自由人から奴隷の立場に自分を置きなさいという意味。幕屋で仕える祭司たちが聖所に入るときは必ず裸足であったように、主のことばに聴従して神のしもべとして仕えることが勧められています。戦われるのは【主】です。

#### 出エジプト記 14 章 19～20 節

19 イスラエルの陣営の前を進んでいた神の使いは、移動して彼らのうしろを進んだ。それで、雲の柱は彼らの前から移動して彼らのうしろに立ち、20 エジプトの陣営とイスラエルの陣営の間に入った。それは真っ暗な雲であった。それは夜を迷い込ませ、一晩中、一方の陣営がもう一方に近づくことはなかった。

新改訳 2017 ですが、14 章 20 節の注釈には「真っ暗な雲」の直訳は「雲と暗闇」であると記されています。直訳のままが正しいと考えます。続く「それは夜を迷い込ませ」は「雲は夜を照らし(אור)」が正しいと考えます。雲はシャハイナ・グローリーであり光です。そのように 13 章 22 節の雲の柱は明るく照らす光の柱と考えます。暑い荒野の日照りの陰となったと説明されることが多いようですが、私は「燃えるたいまつ」でモーセ律法の間を通り過ぎる光(創世記 15:17)であると考えます。これには状況証拠があります。

#### 出エジプト記 40 章 34～38 節

34 そのとき、雲が会見の天幕をおおい、【主】の栄光が幕屋に満ちた。35 モーセは会見の天幕に入ることができなかった。雲がその上にとどまり、【主】の栄光が幕屋に満ちていた

からである。36 イスラエルの子らは、旅路にある間、いつも雲が幕屋から上ったときに旅立った。37 雲が上らないと、上る日まで旅立たなかった。38 旅路にある間、イスラエルの全家の前には、昼は【主】の雲が幕屋の上に、夜は雲の中に火があった。

銘形先生の解説を引用します。

昼間は「雲」ですが、夜になると「火」になるのです。これは文字通りの意味ではなく、御使いの表象です。御使いが神の民を導き、そして守ったのです。また「雲の柱」「火の柱」という表現も御使いの表象です。「モーセが天幕に入ると、雲の柱が降りて来て、天幕の入り口に立った。主はモーセと語られた。民は、みな、天幕の入り口に雲の柱が立つのを見た。民はみな立って、おのおの自分の天幕の入り口で伏し拝んだ」(出 33:9~10)とあります。雲の柱の中に主が臨在しておられるのです。

不自然な人間の理解を超える現象、ヨシュア記 10 章 13 節の太陽は動かず月はとどまったのと同じ奇跡が歴史上実現したのです。太陽は天の中間にとどまって急いで沈むことはなかったのです。ここでの光(אור)は創世記 1 章 3 節、II コリント 4 章 6 節と同じ光、イエシュアであると考えます。約束の地の征服はヨシュアが主の軍の将の指揮下で行った働きでした。今、私にも求められていることです。

## 9. 終わりにあたって

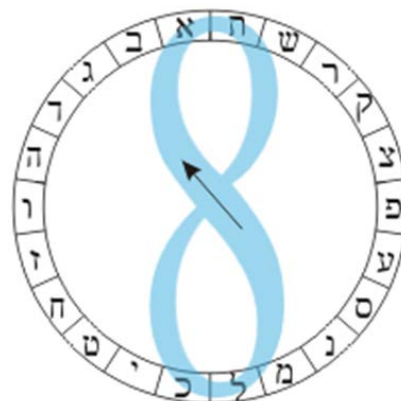
神は 6 日間の天地創造の業を終えられて語られました。

創世記

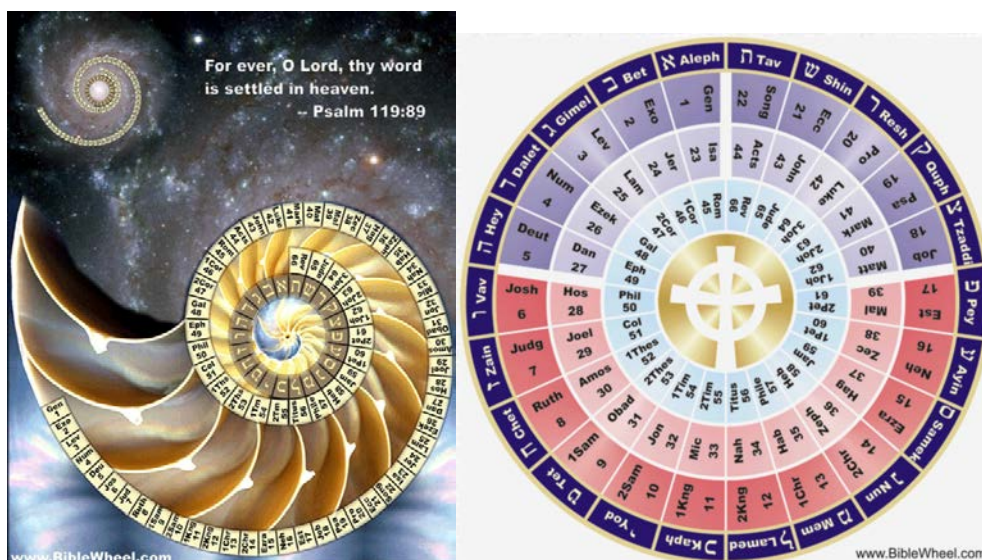
1:31 神はご自分が造ったすべてのものを見られた。見よ、それは非常に良かった。夕があり、朝があった。第六日。

単に良かったのではなく「非常に良かった」(「トープ・メオッド」טוב מְאֹד) ということです。何を指してそんなに良かったとおっしゃっているのか。それはご自分が造った「すべてのもの」(「エツ・コル」אֶתְכֹל) です。Bible Wheel にアップされている車輪の最初と最後の素敵な関係の図版をお見せします。

The actual words written Genesis 1.31 include the so called "sign of the definite object", the **Aleph Tav**, which is symmetric upon the Wheel with **Kol** と説明されています



す。更に「コル」 כּוֹל のゲマトリアは 50 であると記されております。ヨベルの年にすべてがリセット、再創造されます。



バッシュアーマーイム ニツターヴ デヴァルハー アドナイ レオーラーム

# לְעוֹלָם יְהוָה דְּבָרָךְ נִצָּב בְּשָׁמַיִם

詩篇 119:89 【主】よ あなたのみことばはとこしえから天において定まっています。

紹介したHPについてもまだ時間をかけて見ている訳ではありません。正しい箇所、正しくない箇所を、聖書を熱心に調べて判別する必要があります。私の提案も含めて、何かおかしいと思ったら、突っ込んでいただければまことに幸いです。神はそのようなやりとりを嘉<sup>よみ</sup>してくださることを確信します。

2019年1月9日早朝 小雪ふりしきる天を見あげて筆をおきます  
 栄福音キリスト教会 千丈 雅徳